

歲形圖說

農亭部

六

特 別
二 一
2442
6



三 1
2442
卷 6

小野
氏藏書

成形圖說卷之六
田賦目錄
稅則

成形圖說卷之六

昭和十八年
一月二十七日
購本

成形成圖說卷之六

農事部 田賦類

多知加良

書紀○亦知加良と計を阿里多知加良と八田力

税と知加良と漢と租税と王の職あり民の勤と換り

繩儀まて吟味らハ主税の職あり民の勤と換り

延喜式ハ勤民力ありり天

智紀收畿内之田税とんり

大知加良同上凡税と於保知加良と漢ハ正税也租と多

神税者三分知加良供祠具其一分給神主又古語 御調古

拾遺ハ諸社封税とあるハ後分給神領あり 年貢 東鑑或

記○傳曰弟盛集にみけき物と受納あり 年貢 東鑑或

と詠り亦云土貢即御調あり 年貢 東鑑或

献功又任土貢と色又歳貢謂貢于壇 年貢 東鑑或

子宗廟又物進とる武應神紀吉野國櫟 年貢 東鑑或

の所清献上物進とる武應神紀吉野國櫟 年貢 東鑑或

成形成圖說卷之六

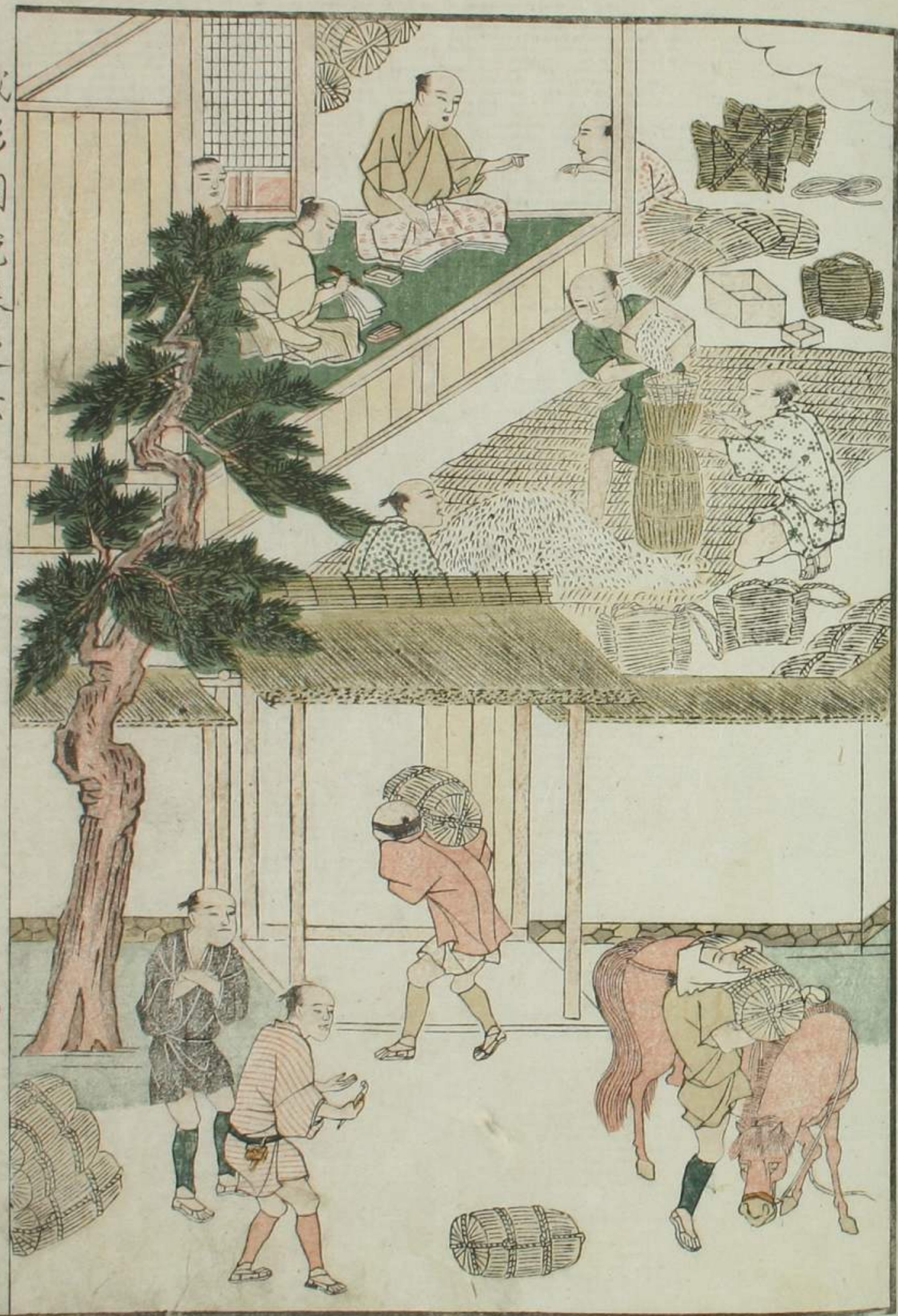
二

紀返之凡吾邦の歳貢夏ハ起四月盡九
 月秋ハ起九月盡明年三月六日
 苞苴と訓詁大贄ハ皇朝御食津國々
 種品の貢進御贄ハ常殿擬御等由詳
 膳式に諸國貢進の御贄ハ常殿擬御等由詳
 ラルキ又古事記の速贄ハ常殿擬御等由詳
 云と大贄貢者往還の疲と天下の主上と
 人の大贄貢者往還の疲と天下の主上と
 瀛海と其貢と拒あはと中贄と私取と天下の主上と
 或ハ友とてと兄弟弟弟と徳と讓と位と即と
 と徳行と仁賢と弟弟と徳と讓と位と即と
 御德行と仁賢と弟弟と徳と讓と位と即と
 物成と幾箇成と云又曰收納既濟曰皆濟味濟曰未進
 地子延喜式○今の地料あり永正中式目は就名主ハ
 姓等年貢地子錢以下無沙汰事とらり年貢とハ
 別々 收納今字音マ
 濟物東鑑奉綿千兩於仙洞是
 濟物東鑑奉綿千兩於仙洞是
 濟物東鑑奉綿千兩於仙洞是

田賦 春秋○説文 賦稅 租稅 以上史記○字典凡稅皆
 之總名也一 田稅 禮王 田租 魏志文帝復頽 年糧 通
 曰賦高曰稅 田稅 制王 田租 川一年田租頽 年糧 典
 又云宋徳宗時揚炎作兩稅法夏 稅子 地稅 以上文
 輸不及六月秋輸無過十一月 稅子 地稅 以上文
 年助 朝鮮 語

蕃名レンテ

夫田地子租あるハ和漢の通規ありて人君之と受て天
 子代て人と書ふの存とする所ありその財成ハ農夫
 由といへとも其功ハ外造化の力あり故に天子代て人
 と治るもの之と請民子取ハ固より其理ありいあし
 ハ民皆農ありて今の高賈のくときを是と田地子賦て



新子載集
 前夏白
 拾々々々
 さあらの
 きんぬ
 の
 目まの
 松

租ありしなり故に式等に正税とありハ公田の御米と
 上子ゆりし漢書文帝除田之租税言農與賈俱出租
 故除田之租則勸農也又宋仁宗慶曆間議欲弛茶鹽之禁
 及減商稅范仲淹以為今國用未省歲入不可闕既不取之
 山澤及商賈必取之於農與其害農孰若取之商賈とく
 らんこれ蓋西土の始自虞夏時貢賦備矣とく田子賦
 あるハ書の禹貢もあつり其傳云賦謂土地所生以供天
 子前漢刑法志云畿方千里有稅有賦稅以足食賦以足兵
註賦謂發賦斂財也古今原始云唐定租庸調法有田則有租有自則
 有庸有戶則有調每丁租二石絹二疋綿三兩自絃以外不

得横斂按通鑑唐紀武德二年太宗初定租庸調法凡授田
者一歲輸粟二斛稻三升謂之租歲輸絹一疋綾純
二丈布加五之一綿三兩麻三斤或輸銀十四兩謂之調用
人之力力歲計日閏加二日不役日為絹三尺謂之庸加役廿
五日免調卅謹按衣食貨財ハ國天地の生所ありて人
日租調皆免子主するハ之と新りて諸民に配する奉納ありて人
 弟の條理ありと改つて改ハ祭法存として人君親
 々々祭里玉が時ハ國の大小郡もあつりて皆祭玉と
 立てて預りの地産と取て神祇に享里天地の生德と報
 以而後國家の用度と達し百姓の撫育と絶ちし因いふ
 一ハ國司とは國宮宰とくしその奉祀も具ふるもの
 ハ海川山野ノ種々の物と横山のたぐひ積是は是と物

植物とし宗社に供へ祭礼終て法人に頒賜ふ延喜式に
皇神を奉し餘を平く聞食むとあるは彝典ありて又孝
德紀謂先祭神祇而後應議政事の類亦見ゆべし其をく
我太古天照大神の皇孫に斯國を授賜して吾齋廷
之稻穂當御於吾兒と勅りて天下萬民の奉貢田穀又種
種の御調物と受納せしむる嚴重大詔と最傳ありと天
津日嗣と申ありつそ大業代嗣くに統御より始て蓋大
嘗乃禮祭祀此亦此より出て人君天地乃生物と私に
之をばざる乃謹敬明の上下に宣告て行ふ是皇國
貢獻の大本也上謹敬乃政と天産を奉て下民に施し

あつては下民を乞ひ教の及ぶりて人君を奉て
其徳澤を冀怙敢て私を用ひあつて蓋人情天然の道
小してをろあつてを免辭禹孔子のあつて人君を奉
て其を其順祀と稱し本より史周紀より日祭月祀時
享歳貢終王先王之順祀也朱子云税給宗廟百神之祀天
子奉養百官禄食庶事之費とるる鞭韃天竺と金人
如来の名目と造て存せしむる帝勅た道の地と
いつとも奉祀奉職の通あつてはあし然も天地間の
其をばあるあつてはあし人のいともあつて夫
るは有司等天産の衣食を以て私め物と考へ違ひ

愛欲嗜好のまゝに興奪と自由し同前の者ハ惠と加
しハも編ハく國邑ハの領地を國用給ハふ及ハて是非
く苛刺の政ハを立ハてる是先王祭政の實と失ハふて愛憎偏
頗の私ハを出ハるが如ハかり且ハ又下ハに興ハるはこれバ民情
ゆるまり我儘と働ハく如常ハに節儉と勤ハて甚ハく守ハるハ刻
て赤貧ハまハとハ爛ハしハ俗ハより太過ハて田産ハを持ハたハと不能貨財
者ハも夫ハのハ中ハに仍ハるハり共ハも下ハに生ハきてハ諸人ハと
共ハも天産ハを受ハるハべし然ハども天命ハ者ハも天の生ハず
く久ハく人習ハ日ハにハ寔ハて直道ハと以ハ法ハとハもハとハ迂ハ一ハ也ハし勤
まハれハバ邪路ハを走ハて有ハ目私ハとハ行ハひ人情離叛ハて人君滅敬

の道と奉ハふと能ハむこの逆亂と畏ハて乃ハ刑罰の辟ハと嚴ハめ
し威讓の命ハと希ハむハり志ハるハる奉法の令ハ田賦の制
之ハと上ハに取ハるハのハちと考ハへハて無理のやハうハと怨ハむ思ハふ
ハ共ハも其祭紀ハを奉順ハし臣民と貴育ハらハるの存意ハとハも
ざれハバ也今復ハるハれと古ハに稽ハふハるハ崇神紀曰官無廢事
下無逸ハ民教化流行衆庶樂業異俗重譯來海外既歸化是
歲 天皇十二年秋九月始ハ校ハ人民更科調役此謂男之弭
調女之手末調蓋 天星光ハに鴻基ハと治ハ遠ハく皇猷ハと張ハて
外國賓服ハし天下太平ハあり因ハ大田田根子命ハを以ハ祭主ハと
し神祇の圭田ハと定ハむハるハ乃ハ前ハに謂ハ祭紀ハの更奉職

の道其茲も出て我 邦租税の始必礼典の賦ありて之
 他ハ男女の調庸のより上も取ふいしより弓弭の調ハ今
 乃太刀馬代比おとく手末の調ハ後の手作布の属あり
御鎮座本紀曰男弓弭之物大刀小刀矢楯鉾鹿皮角猪皮
 忌鋸忌鋸類是也女手末之物麻桶綿柱天織具荒衣和衣
 荷前御調 類是也 神功卷も新羅既も服事して毎年貢男女之調
 常以八十船於是高麗百濟二國自来永稱西藩此三韓朝
 貢の始ありて亦男女の調も續つるも後仁徳紀五十八
 年冬十月吳國朝貢 又雄略紀曰吳國遣使貢獻通證南
 國實則 宋朝也 清寧紀三年冬十一月海表諸蕃並遣使進調所謂
秦漢華胄歸化 なるものありて遂も世々傳て絶むべし

て民田も租ありて至てハ封建の制郡縣の法も今皆沿
 革あり抑萬國を修て一人も取らむいしおとくは 孝徳
 天皇も昉より本紀大化元年八月朔詔曰隨天神之所奉
タミヒニニナニ 寄方今始將修萬國中遣使者於諸國錄民元數中白雉三
アキナク 年春正月班田既訖凡田長三十步為段十段為町段租稻
ヒトツカナカラ 一東半町租稻十五束又調庸の法ハ是より前大化二年
 の詔も曰凡絹絶絲綿並隨郷土所出田一町絹一丈四町
ナセヒラフ 成足 兩謂之足 倍長四丈廣二尺半絶二丈二町成足長廣
ハ 同絹布四丈長同絹絶一町成端別收戸別之調皆布一丈
ニ 二尺凡調副物鹽贄亦隨郷土所出 畧中以五十戸充仕丁一

人之粮庸布一丈二尺庸米五斗凡兵者人身輸刀甲弓矢
 幡鼓とあり令義解曰段地獲稻五十束束稻舂得米五升
 即於町者須得五百束也 是上田一町の率あり五百束ハ
 四百束ハ廿石十束の搗米五斗也下田三百束ハ十五石
 百束の搗米五石也下田廿束ハ二石五斗也凡稻一
 束と云ハ一把と云ハ二十合と云ハ一握あり人の片手ニ握と一把
 ハ一握あり一斗と云ハ一斗あり一斗と云ハ一握あり一斗と云ハ一握あり
 舂て得米と云ハ一斗と云ハ一斗あり一斗と云ハ一握あり一斗と云ハ一握あり
 の積子稲五百束と得米と云ハ一斗と云ハ一斗あり一斗と云ハ一握あり一斗と云ハ一握あり
 ちとあり而孝徳紀の租法一町の粗稻十五束と云ハ
 ぐ需米ふして七斗五升也二十五斛の内より僅七斗五
 升ちと年貢を納るふとなすは三十三分の一にして一分よ

里と少き田賦ありき三代格ハ令前租法熟田五十代
 租稻一束五把得米一升此大升也と云はるり三百六十
 歩と為五十代とありて五十代ハ即一段と云はるり此孝徳
 紀の租法と云はるり一升此大升也と云はるり由は古者十合の
 満書に大升ハ三升と受と云ハ減大升ハ三升ハの倍と云はるり
 格ハ凡稲一束五把ハ一段の租より一町ハ七升五合也古
 斗五升と云はるり合て而七升五合の搗米あり 夫令前租
 法云くと云はるり白雉の後租法改て重ありしと云はるり續
 紀 文武天皇慶雲三年遣使七道始田租法町十五束と
 云はるり白雉の時既ハ町租十五束と云はるり又始田租十
 五束法と云はるり是中間の事と云はるり又元明紀和銅

六年二月始制調庸義倉等類五條同七年官符子絹絶六丈為足調布四丈二尺為端庸布二丈八尺為端高布二丈五尺為端志うれば是亦大化調庸の足端寸尺と增長めらるるやはれども元正紀養老六年の官符に公私出挙取利十分之一とらむるに當時尚薄税とらむるし書紀通證曰 本朝之制以封建也舊矣至 孝德朝始立郡縣之制平治以降漸復為建國然守尉非王人鎮制仍戰國雖規模相似而其去古也遠矣秦六國と滅して天下を併て郡縣ともししころハ六國の諸侯皆讎敵あり帝ハ我 國家社稷襲封の土地と兼并て其賦税と一人に納るやう

子ふされハはりまはるるべしと白石史論ハハいしととも孝德紀の田租ハ一町に米七斗餘絹一丈布一端とられバ其民子ぬあふの租法ハ西土三代の時とて邁るる輕斂あり拘儒曲士周の九一税法と天下無双の事ばと稱しぬるハ我が邦典に憎のこゝろは田賦ハ和漢をふ古今大に變改あると考へるるより國史延暦十六年詔曰古者什一而税謂之正中三代因循頌戲作矣國家薄征利農勤恤民隱是以制令之日田一町租定為二十二束其後有勅處分減為一十五束云々是即白雉慶雲の制といふ 桓武帝の詔に古者什一の税といふは

慶雲の東田賦又重くありしや按マ弘仁式マ上田一段地子十束中田一段八束下田一段六束下田一段三束とあり是ハ以前の租法一町マ十五束とあり準マ視マバ一段マ一束の地子ハ甚マき重征マあり蓋調庸の賦マと除マきその賦法ありしや延喜主税式マ據マ凡公田獲マ稻上田五百束中田四百束下田三百束下々田一百五十束地子各依田品令輸マ五分之一若總計國內所輸不滿十分之九者勘出令填但不堪佃田聽除十分之二其租一畝穀一斗五升町別一石五斗皆令管人輸之マとあり式の時ハ五マの一の納あり自後マおいてハ天運漸く澆季マ

務マて世の事跡文マおして事愈おき國用廣く繁く模倣の俗起マりしや始慶雲の頃より唐國の制度多マに倣マひ玉ふマしととも出来つて又事マのの拘マ里マ多マくありしやまめきて皇祖親戎装マをマめマ詰問マ流マつるの天威おとろへ玉ふマし似てきマのめマでマいマとマき醒代と申せし後まマも將門マ紙友マが逞マ儔東西マに報マきまマめマせしハ時運の志マりしマる所マハ申マふマるマ上文華マは流て武事マを次マし朝憲の海外マに震マがマゆマ志マありしや是マに就て世の訥マりマきマあマどマも申マんマハ之マをマ上マ古マに就て之マに當マて世の終マむマべきマも也抑文マと師マとせマどマして武勇マのマ尚マぶマ終マりしマハマのマ志マりしマハ人心の決マ断マハ必武勇マより發マせしマ多マし但マ氣マばマつマりしマて道理マをマ崇マめマれ

みハ楠中將と第一とし次子新田義貞とてその義勇何と
多しと餘端みれいされりされは義貞さうその武將
まておはしりれども勾當の内付は謀と惜て大軍の操
とたづししるるを勇断なきは似て軍功寧しく後の律と
殊されし楠正行の高師直が吉野の宮女と溢出しし
と進付て取返され志うば敵威あて地の宮女とすは
御りしと武人ハ志うば志を感あて地の宮女とすは
にし惟の契と結ばれべきとて固く辭て交付うざりし
ハ義貞の法と無隔せし是道義と守りし忠孝の勇烈
ふるまひし夫人の悦ぶ所ハ奇を甘肯あして富貴の厭
ふ所ハ學問演武あり故に治る女とて從容とのを以て
武事と急りぬまげ士氣逸豫み安して徳の遊藝み日と
暖うし筋骨と芽乳心志と困ひる女とてよく奈と好み貨
と弄て風俗日と顔て高貴と執を向うとてし進まざる
節傳のさ書まわしし野芹とていふその人情ハ移り
易きとのめて我と吾同志乃交りて色不引親めりうち
みは其人乃風儀と知いさしは何れもねども何の情
う其風子移るそのまては君上と仰まざる風儀ハ高
貴なり吹おろそ風のごとく慧の字はいづもさう靡き
でいささよて人君節守生さうは質素とす好ありて

みハ浮華此風儀よかすかま玉をさうあ時ハ下まで旬
然と飾と存めて質素と勤る事より文學の進りるハ義
素風流の政ハ費用の起ると功と法と野要あり根本
と中子車れ赤輪乃ぶとく一と法と野要あり根本文武
中みゆ文ハ漢かまきと勢の道理と辨しは通ゆ人の
兼不中ハそりハ道理子くさく人いしてと取の元根
穿あて一生と全くはる事也武の道ハ弓馬剣道の技
長し不中ハ上の宰相次第子用と海とさうさうさ
とゆえ中ハ下ハ押さうて法どしてハさうめ屋
道理ハ好ある人の心分るお烈の務とさうし此義の立
出せハ知不中ハ技藝と修らる人ハ飲食衣被の物好
く未練さうさう進從ハ自然と政さうさうのさう何
取とさうくえ其好この所文と武との二乃道より出
みて人の風俗との二乃さうは是武乃善一ぬれハ自然
兼在風流とありて果ハ情弱の素質子隔るさうさ
りり凡圍ハ風あり土ハ俗あり中むりハ俗の國
土の風俗とて来て我の風俗とて此と其ふとさうさ
とのせしれハ彼子似して此と其ふとさうさ

皇國 推古以前數百世文字も亦く禮制を備らざれと
色世の人から乃をせられてせき為ふ治と成は天地の
ハ自然乃人通ありて情をよかまひしがゆゑなるを
就中 諸尊祓除の功化より清浄なるをせしむる風儀
みて死穢と忌とつゝ乃俗習なりとせしむる風儀
不潔なるを多く浴らるるを掃らるるを時々尺布子湯を
しは膚と拭ふくをたり或廁を登てを多と濯り洗
るも何り或ハ脚布盤みて菓子と油へ食物と懸ゆり
彼の志くせたり亦 邦にてハいうるを禱願もて色
より虫てみ水つうをぬいやく飯旨と種禱櫛ハ分り
る申せハ情又唐人ハ万氣弱く必辨より血のいけ
とんてハ情おのきと友律の死しるるも情哭み及ふ
ハ彼ハ愛情の厚やといふも又殘性あるハ日存人よ
より朋友までよも連累つゝ又生ふが罪は肉と骨
里或ハ人々煮殺し車みて裂あどの刑罰あつて紫蘭
室よ入て久しけ連ハ其香と覺えげ鮑魚の舞は常任
れハ生腥と忘るの樂もてそ風習の志と述るる
よしとも性ともあまも一や我 邦子なしてハ難
まぶも快ともせざるも波ハ馬牛と馬と帝の禮と
又

君と弑殺して物とせざるハいうまは田氏曰
西土の風文條ありて武きくは馬史も程縁して車機
と何也まてるととあまも凡ハ力量もこれ子庶して
一々も味もする人ど七日中人と相撲とてハ輻
も辱て怒るも人聞見録曰唐人力量極て日存人劣る
ととと流り又此方の人の肩は二分七寸七人と當
と擔て汗を流して大息と嘆き僅も十歩二十歩の
能子懋息ありて風土俗の愛もつゝ所の志は了地
ありされバ風土俗の愛もつゝ所の志は了地
みありとせざるハ唯本の生つゝ所の志は了地
み出て堂殿思慕の情ハ名目文章も拘るあしは
やし中世の好むは凡眼も憂を悦ハ美は
みあまがバとく女の好むは凡眼も憂を悦ハ美は
思ひ通してとせざるハ何れも生つゝ所の志は了地
父子乃恩愛思慕を我と多き人聞見録曰唐人力量極
わしるるれきてはまく多き人聞見録曰唐人力量極
まゝえ又或ハくせりするわらふと出まると何れも
心の根くくよし何れも生つゝ所の志は了地
ゆうじと縁があまも性もて正とあまも時ハ

下級は取上げ色やけ上り人の仕屋もつゝあるが
一又礼儀とていづれも人徳もつづつては互に香をもて
蓄人かあつちく久くは逢ひては互に香をもて
つゝあつちく久くは逢ひては互に香をもて
よハ何れも人徳もつづつては互に香をもて
せやうとて人徳もつづつては互に香をもて
礼儀あり上り男女の差おもそのありては互に香をもて
ハ吏婦互に恩そふのありては互に香をもて
さいとれは敢て義公乃言ふは思ふに
てとては敢て義公乃言ふは思ふに
ここの事乃佛おぬ氣まは上りては互に香をもて
引の事乃佛おぬ氣まは上りては互に香をもて
て禁制刑罰とておさへつゝあつちく久くは逢ひては互に香をもて
心減に取つき居るを百濟王おのれは他はと奪ふと
志くは家にお前けはさして利口澤と斯方より討つるを
新に化されし馬子と君と弑まわすせとては互に香をもて

る聖徳太子あどりのをて文飾憲法と他出されしと
と生きたる存振つゝあつちく久くは逢ひては互に香をもて
子事孫文あるる事さて其申葉の子は姑く急ぎ東
倉乱るる事さて其申葉の子は姑く急ぎ東
鑑子實朝の時関東諸御領乃貢可被免三分二假令毎年
一所次第巡儀とていづれも人徳もつづつては互に香をもて
免して諸領が一度免らるハ何れも人徳もつづつては互に香をもて
と百姓も共あると持の令あまは尚初ソツカミの租法推して
免るべし或書に楠中將八十分あつちく久くは逢ひては互に香をもて
と何れも人徳もつづつては互に香をもて
利氏の時より四分ふとて十ふして四と收て六と百
姓も免つるの法を行つり異存太字記に尊氏諸國の守

獲として五十の一の軍賦と輸せりと高經の執事たる
よ及び又よ令として二十の一なりと是れは
皇と法將よ又へ皇將軍家譜よ尊氏使細川和氏監諸國
租稅之事和氏悉押公家之領地以為武士軍忠之食祿於
是師直等私領皆倣和氏之所為撰関大臣以下諸公家皆
到師直宅歎訴之尊氏直義聞之僅分授領地とあり是後
文祿四年豐太閤九條法制の中よ天下之賦稅三分り二
者地頭取之三分り一者百姓自取之爲きよらんらんり
當時の田賦は田一畝よ福一石六斗粟八一石二斗と首
りして村の位次小二斗り小賦又下る村の畑ハ下村

乃畝より一斗下り賦る也其賦米の升ハ々升寸
法内矩潤方四寸九分深二寸七分ふして梁りけはふ
粟成あて收係賦あり此よ由て歎る小延喜の頃ハ一
町よ一石五斗の租賦あり中喜よりハ僅一畝よ一
石六斗の稅額あり一畝ハ十畝をせしはとまき一
町よはさるよ一町の一畝をさる一畝よ一町賦よりと
一斗量の租とふハ一町よつきは十四石を斗をど
上への益丸也蓋是りはふくは給布の油席とて
租とやよ深くは是と傳き米のよと取るの賦あり
ハ年差その賦重くさるの理あり○孝謙紀寶字二年

勅曰吏者民之本也數遷易則民不安居久積習則民知所
從頃年國司交替皆以四年為限斯則適足勞民自今以後
宜以六載為限省送故迎新之費按王制云諸侯聘於天子
五年一朝朱註謂獎賜厚而納
比年一小聘三年一大聘
貢薄納貢從薄不匱其財也承久記曰日本國中侍
ども昔ハ三年の大番として一期乃大事と出立郎從眷屬
よりあるまで是と晴とよりあるども力を下りし時ハ
手ひりりつりつり衣笠とさよかけ徒跣までしりりと
何の是京の漸直子産材と費し後ハ立も何ぐらぬやう
に貧乏して帰國せしといつり或書よじりし強倉よ清
也一年して在國三年の限税あり之をよの出息とせし

一年参直の費給と支ふ後ハ三年の出息として一年の
調度と償がごとくありしを一年に亂世の初ハ百餘を
業と先ふがゆゑハ山野に逋匿て山寇跡伏とせし人
と掠劫くせしめて下ハ多しして謀叛一揆と企てし
まやうに民と過し下りより税法をまゝあり又徳を
ハ勢とまし勢と抑むれば恩根と銜て初よ及ぶるよ
家の領地と押へりしを是ハ唐の樂天が養鷹篇よ飽
ちしよば放ちぬむれハ別ども人事とはしりたるよ
似て初よ二葉の湖ともしよし終よ徳仁の亂よ入て
是利氏の世と終るまで生民の塗炭極まりありし

金革と社て風子梳重雨よ浴より將士のを礼と擧め國
 城ありの大事よ要るゆゑ女は武功と建てて城よ堪
 へる者より貴はまし又戦ふとも農業ハ一日として
 休息を乞ふべしこれとそ戦士人の外は向又よめを緊
 成碎き歎孤擗よ比すればその報難懸隔あり女固より
 治安よ屬すといへども士類の筆田地よまきめのハ上よ
 里某々の福成給て扶持せよはれどもに上の祖成徴おと
 弥急よして農夫の勸勞よ就はハ軍國よ愛するべし
 一是も兵農二ハふもそ治乱俗成是よすり乃ありさ
 満より況や大化紀元より享和改元よままで蓋一子一

百五十有餘歳まゝく之とらふべし今代邦君文武の職
 と兼國民と子育せよは寔に 大家威徳の至里兼平の
 極より次至し夫氣運一とび變して前代の礼樂復用
 登りては唯南を乃務成知ましく民各をふとゆるり急
 るハましくらひしてはあまあり

取箇 和訓栞取數の義ありとべし故に箇の字を用う郭註は
 箇ハ為枚數ともいふべし或曰取所あり今之と所務
 と云所と男てかといふ在所と何れか加任處と須員かといふ
 云の例あり今按に即取毛と通なり取毛といふハ考て
 るべし
 取毛 ハ穀より諸國風土記より幾毛田幾毛取の
 事ありと云ふと凶年乃租と實毛取ありといふ 賦

升と齋て糙米シロコメよりナメ合式ハ五合とある大概ハ五合
ありしあり俗名之シロコメはシロコメと云されば田一段の成福一
歩一升積まれシロコメハ三石六斗積まりて一石八斗六
斗持統紀タケナカ田租ヒトコトシキ賦シツキあり一畝一人ヒト分の斛コシあり凡一
年三百六十日されば一日一人ヒト五合ハチの合前ハチあり
又昔ハ一段と三百六十歩とし又仕官の稟祿フナカサとも一段
の命とありともいへり厘取段取ともは此昔法より出
るなり固本録曰一升毛一坪是と定率チヤウリツと云一升毛五
分取ハチ斗五升也九合毛ハ九とけ六斗七升也ハチ
七斗五升九八合毛ハ八とけ六斗也次第ハチ斗七升也

合券あり又申田盛二下十三ありは云ふれよ斗五升
下田十一ありは斗五升ありつとも九合毛ハ九とけ
八合毛ハ八とけり但定法高ハチ五とけ一升毛乃
九斗あり○又取箇見賦ハチの斗と石盛と云ふハチと料ハチで
地の位と賦ハチと叔ハチと量ハチと盛て租米ハチ裁定ハチの名より上田十
石盛一段ハ一斗五升中田十三盛一段ハ一斗三升下田
十一盛一段ハ一斗一升下田九斗也上田の斛盛一
石五斗この穀一坪ハ一升ありハ一段ハ三石あり申
ふして来一石六斗ともは是と云ふ納あり七斗五升
のえかり是ハ一歩三百歩の積りてより四公五民

の時に右の一石五斗よりとけして五斗九と云八石五斗
引て四斗と云八石五斗と云八石五斗民請貫行曰田畑の斗代不感ハ
増地の時一石土斗五斗十石感と一石斗十石
ハ十二盛と名付此九箇の法田公六民又公五民の九
あり不所より言る者といども九箇の法をハ一
あしてより換蓋多く下お積の法を以てあよりと云
ままで法を於て差ふあまし強ハ富未畑方斗五斗
代ハ兩小判金六十日 五斗代斗代斗を永納とし上才の九より
と下免とすゆと上才ハ三分一銀納ありて石四十八
文の積兩より名二斗五斗考りよ高と云一の九米下

ちる仙臺五石代米澤と名代此所々に替り也後河邊
を録ハね違をし今云ふくの有毛取と云ハ昔ハ稀未
りしと毎地方掛の人は法はよと一統五分くの取と云
五分くの取ハ米名あるハ二割と云て五斗ハ米五
斗ハ取はよと一統強も糞代米酒費乃料と成けお地面
お付と米室式のき取りとのきハ浮袋運上才の小物
成管作得の肉より出せば名目と云ハ田畑を種あり然
を畑猪の村ハ漸よと一統回方多ハ常と云と云し村役
人の心は富きあともあり五歳内の中一回一及米一石ハ斗
位有といつた一歩一斗三石毛
とらん由罷東乃上田ハ産一畑一及大豆二石飯あり
買取の上畑ハ一石一二斗ハ元重一斗ハ中畑上は産し

糞代と上方ハ根二十餘程あり置東ハ金一分計り不
 といふべきと左程の遠ハ凡そ置東まで上畑の取ハ
 申の取ハ准じがぬく上方と置東と地面の位ハ上と
 申程の遠ハ宥宥の申さるるに取穀とこれハ置東の遠
 し然ハ上方百姓ハ能ク丁寧試みし餘方の能ハ大難
 るより保つて土地ハ罷とハ凡そ免相亦者強し罷
 束よりハ少免強られバがりのろい言乃て耕
 作ハ免と入らば免高くあらバ一ハ免属て作
 置し置東ハ田多き村ハ置東の遠とハ置東ハ田多
 村方の猪あより置上方置東の遠とハ置東ハ田多
 曰浪納の時浪三百目ありは石三升の早米と石二
 升の末米と引相場五十目ありは石二升の早米と石一
 米夫年一石一斗一升五十分とかけ其又一石一
 割と加へ一石一斗一升五十分とかけ其又一石一
 省浪三百目と割置石九斗一升 ○越石とハ百石の村
 田舎の元米五斗と置き置し
 て段別十町あり内五十石此段別ハ五町ハ御料也又五
 十石此段別ハ五町ハ私領あり是ハ甲乙不足ありれバ

越石ハ一斗不足ありて是不足の方ハ御領より
 私領の方ハ此段ハ御料より置き置越石と云村より村
 つとさして越石と云又御朱印地十石分持と宗姓より
 御料の身ハ或ハ五石三石米と出さるとも越石といふ越
 石ハ物産計ハ高掛法段ハ出ど ○税則の階階と云
 六と先置村の上申下乃三等と親次ハ此地のの上申下乃
 三等と云はづし固て置代ハ高を究るるともその他ハ肥瘠
 其村の盛衰法障の運嫁都鄙の遠を又ハ粟粟の石無
 して産業の豊と約と糶米の多寡を宗姓して附穀の
 輕重優威の親疎を損子辨一定じる置き申さる凡穀

ハ年々成熟易くざる地より次々擬ふるむり
て始終附穀と完じつと何る愈々又年々より不
熟より水旱等の災何る地を生災の多少と審察し熟不
熟の年數と計て申すも孰て附穀と完じつと
と一里又穀ハ格地の後席上小く深らしてと善く
と何り然とと波此土宜哉較考てよく附穀の多少と志
里して正次愈し平壤録云秀吉將薩摩田地丈量起稅以京
倭攝之至於肥前肥後是謂文祿の賦法もて其賦ハ村軍
の上中下を子田一畝も米一斛と租とし市地ハ一斛之
斗と租と次但上中下の差り里又官所ハ租ふし
莊屋名
主の此

是一段より米一斛元の賦と相高し加へるの
法あるれと今も今も治革差有り按て延喜
主稅式は五畿七道の諸國大上中下に分て之と四方
配る遠近中乃制有り凡諸國貢調庸者越後佐渡隱岐三
國並限明年七月長門國限四月伊豫土佐國限二月是並
自餘如今其陸奥出羽兩國便納當國西海道納太宰府
其出納帳並附と納渡あるハ令よんり又書島貢云
証稅帳使申送と納渡あるハ令よんり又書島貢云
百里賦納總木本全二百里納銚木本全三百里納結服
半稟去皮日結四百里粟五百里米註粟穀也内百里為最近故并禾
本總賦之外百里次之只刈禾半稟納也外百里又次之去

藁鹿皮納也外百里為遠去其穗而納穀外百里為尤遠去
其穀而納米蓋量其地之遠近而為納賦之輕重精麁也是
なりと云ふ世界の遠通と云く其賦の輕重と參定^{カサセ}之
る國語孔子云先王制土籍田以力而砥其遠近賦里以
入而量其有無任力以夫而議其老幼と云ふおれし兩
分西土の田稅ハ諸省各異其他の厚薄肥瘠を隨て收穀
の多寡稅課の輕重各一^{チシク}定まると云ふれども大抵元法
に則ちり^シと云ふり十八史畧云元以耶律楚材言始定
天下賦稅上田每畝稅三升中田二升半下田二升水田一
畝五升高稅三十分之一五戶出絲一斤以給諸王功臣湯

沐之賜鹽每銀一兩四十斤永為定額今浙江一處の田穀
稅畧は上田の畝ハ畝毎小穀子と收ふと云ふ麁米と
倣ふと三石納粟浪三淺納米五升と云ふ中田の畝ハ每畝
小穀子と收ふと五石麁米倣ふと二石五斗納粟浪一
錢二分納米二升と云ふ下田の畝每畝小穀子と收ふと四
石麁米倣ふと二石納粟浪一淺納米一升五合と云ふ
凡唐の官府は用部升其徑四寸三分有奇深二寸零
五厘有奇是是一升と云ふの量也此方の京量と云ふ
計に五合八勺四抄七撮と云ふの實積あり故に唐の部
石ハ此方の五斗八升は合七勺あり餘ハ量の部
に詳右之等の田地收穀異に課稅と此方の畝法升法に
て一段ハ積めして算する上田一段ハ穀京量と云ふ

石一斗二升半磨りして三石六升ちりて上納銀五錢
二斗二升半米五升の合より申田一畝に穀京量より五
石一斗半磨りして二石八斗五升上納銀二錢九厘餘米
二升餘より下田一畝に穀京量より四石八升半磨りし
て二石四斗上納銀一錢七分四厘餘米一升五合餘より
是即戎上世延喜式の受納の則と合し今之と上世に
推し漢興ておもしろく秦の愛法書と焚き斂越重し
て民と惡し多し貪かきおもしろく下さるるの或政と稱し
或兵起りておもしろくわらわらおもしろく後と是反て秦乃
運二世のさるるごとく自滅と招く所よりと故に漢乃祚

越後^の租^の斂^の輕^のと^いつ^とこ^と又^慚が^はら
る^るあり^周公^謹云^自井^田之^法癘^賦名^曰斂^民幾^不聊^生
獨^兩漢^為最^輕非^惟後^世不^可及^雖三^代亦^不及^焉自^高惠
以來^十五^稅一^帝再^行賜^半租^之令^至十^三年^乃盡^除而
不^收自^是之^後守^之不^易重^之以^災傷^免租^初郡^無稅^行軍
勞^苦者^給復^陂湖^園池^假貧^民者^勿租^賦又^至於^即位^免祥
瑞^免行^幸免^民資^不滿^二萬^免而^逋租^之民^又時^貸焉^何與
民^之多^耶此^三代^而下^享國^所以^獨久^者蓋^有以^也文^獻通
考^云賦^稅必^視田^畝乃^古今^不可^易之^法三^代之^貢助^徹亦
只^視田^而賦^之未^嘗別^有戶^口之^賦蓋^雖授^人以^田而^未嘗

別有戸賦者三代也不授人以田而輕其戸賦者兩漢也賦
之重者已不可復輕遂至重為民病則自魏至唐之中葉也
今清の明の代は蓋亦漢の租法と畧相似たり韓事品彙
曰朝鮮ハ毎毎都裏より八道一畝差官とて人役人と
下して田作と見ふと一凶年ハ八年貢用捨わり運上
ハ十分の一二をせし敬差官ハ正て正道とて擇て云
付也集義外書曰 本邦王代ハいふに及むと民家の
代と歳とを貢法法用とて古の制の殘り也所
れハあるは皆十一の貢ハ過便 日本此土地ハ
ハ廿四乃法ハ用とて一と一と一と一と 日本乃土地

の損益新よとハ皆貢法と用たり或同今乃穀と四
十分より四十分は十一の貢法と用たり今
本は十一の法法用とて大少少也と武士ハ一年
を立とて却て私の課とて一と一と一と一と分にし
て一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
入道ハ用とて一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
来て田作ハ八年貢とて一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
ハ貢とて一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
姓とて一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
して一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

地主といふものゝおとまりの後のごころ城下へあつて
屋敷とまゝにみえをいふものありまゝに民をさし
すして十の一城を出しつゝあつて士族扶持するものあり
いひていふものあり恭儉質素にして驕奢あはれはなし
あつて十の九をみえをいふものあり士族とさし
城上より扶持するものあり知れぬ扶持切あつて
てまゝにいふものあり十の九をいふものあり士族とさし
てまゝに農をいふものあり民奴僕とさしていふものあり
いふものありいふものあり農兵といふものあり
いふものありいふものありいふものあり

越後まのりにある魚し○或同農民を業よりいふに
奔里必家自然に不辯よりいふは津令のまゝにいふ
といふものあり然して天下流風の志よりいふものあり
屋の白氏部會よりいふは生活といふものあり
おのりよりいふは田畑のいふものと通していふ
いふものあり業といふものあり民といふものあり
いふものありいふものありいふものありいふものあり
いふものありいふものありいふものありいふものあり
いふものありいふものありいふものありいふものあり
いふものありいふものありいふものありいふものあり

て事と拱し游惰の生と好ハ是一端の事ありて早急人
 情ハ別々なる事しなれども其苦む何ぞ存業を捨て別
 ざりて奔しや従来清泰の家用勢の不足と賄ふは假貸
 倍從て大賈巨高の爲よ唯伏せられ止むと得ざりて
 百姓は衆欲とくまきハ子姓力とて業を勤むるも
 常々匆くして唯俸寒と免ざりていと恐る固自燃
 と都門子出て賣家の奴ともりて快と人情の多し恥
 ととらふと心とくは然ハ而性と哀愍と子のごとく
 其業と勤めて有餘あり有餘ありて後園内の人みと改
 て外境を奔らんとはむと一村くいと各力と同一樂土の

地と去る事あれば誰うハ較て外と都門と且中山野河
 海は由て地力と致し國は各河の人ハ助ありとるると
 きハ先始財と費はとも新用と興行して其用と支給
 一める所安堵ハ凶威とも懐濁と及ぶばいさする辯
 依者として都門風流の俗をわたりて其子性して子金と
 獲ふと証薦とも入る其十里は落意と土と離るの勤
 情あるべくは第一法慶の家風ハ領事と存して都
 門と末ともれバ入る道と學び落し就く其都門の風領
 國子移さば軽蔑日と通て長くぬねり領事の風都門は
 移さば質素自然より都門ハ交代して久しく在る

憂ぐべき事あるは君子幼より教門深宮婦人の事より長
ありて俗禮は拘り外親と事とし心奪り肉熱し我は心
の民情形艱辛苦の俗より五穀辨へど四弊動じ僅
き書と誦し過れば揚々自得より早く嬖臣頑童左太媚戲
まで金其痴と善成し適英特の資あると一たび國政を
執んと欲して外戚の政と聽つたゞ物態人情と解さ
れは目前の苟且と務る日弊入るるは月弊あり月弊ふ
さかぶとくされども歲弊あり年弊年と積て皆不便な
つまり國內擧て空虚あり是前より謂基本と動り子意
なく習俗は纏繞があまり於是有志の法度醒然として

左右世官の國は益多きを境に依り處士浪客の世故は
老い事情は幹するに因じと欲すれば何國輕視して一
藩指揮と交ざるを憚る故に人主は先言 邦の國難と
知て國內の民情は達し自然の法律定規を立て基本と
為し風俗の正しきを先とし但法律ハ一代より立
て右の律令はゆきゆくも是も何れも賢才を擧て良
否を以て處し夫人の智量ハ賢愚を懸して各派あり賢
者ハ賢と進め愚人ハ愚と親じ是自然の姿あり唯我の
智を賢と及ぶといつても賢と得て臣とすれば是我の
賢とあり齊桓公ハ夷吾と臣とし蜀劉備ハ孔明を得

くらの頼桓公劉備ハ其智管仲諸葛亮こくわハ必かならずとていふべ
賢と用て國を利するハ我の智なるがあまり○是等ハ
轉てつづべきはと何れ管子晏子はと其の智を施して
天下國家の事と治るとつづハあつたはづし況や後
の是等の事と紙上は議するものハ漢籍のまら義理
と讀むのちなきを以て天下國家の事と我輩申す何れ
うをましくおもふらんハ修陽師のの上さうばもも
あつじ新井氏の書るものハ學問の事ハ供はも謂いつけ
やき又もて何れぬは東坡のつひしはぶくにてその事
久くくは通りらんハわりのがはし叔世にむらはき道

ハ何れぬ勢あるとそれと必かならず行はまくえいらんハ
腐儒は何れどは愚庸の人きん孔子大聖さくの何
らましめて容れれどて道の大なるとんると顔淵と
いはれし道の行るとつづハいつまの世をて行るまし
きよハ何れどは世は何れどはハならとあらぬの勢わ
里ハ世界でいうはありもたるハいうも行る
づしこのたの何れはぬはぬは世の行をぬハそれま
でのみあるづし人の事はづき事とあらが代りて憂
へんハいうあるづきどたく人の事とあしは事と
おもふんのはハおのれが為の學といつづくづばわ

る事せまじとせむる言はきくじの道みしてこれ
ぞ人の為なりぬ学あつべし志うつば今日の学びも先
よりこの事のため有^んやあやとよくくはる日うつべ
き事ぞかし夫老列莊諸氏より始て佛氏の學のぶと
明徳の事よつとむとつべうべうべされど天下國家
の事の大經大法よむてハおぼはの事のごくにてそ
獨^りとほむるよ言ふとありともむさる言ふといひて
一管子のぶとき區々の齊と補て天下諸侯と九合しそ
功ハ孔子既に仁とめて称られき今もそ書とるるよ政
事よあつて志うつべき事なきや一もつとむる言ふといひて

も亦これよ次ありされど孔子の學よおける門人つ
よ従事せし業ハ詩書礼樂の道よ仁とつとれとめて
ちあし又邦と治とつと韶舞とつと答つられしつと
晏子ハ時の賢大夫と称やとあよとて孔子の事とバ
禮樂と事とし驕奢のものとを君よハつとつとあつと
は晏子禹の道と宗とし儉とつとつと一狐裘三十年其
性の迫きおよ僻せむるつとつと夫天子諸侯卿大夫
士庶をくく儉とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
鳩潔未判のせよとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
美ありとも驕且各なりハ觀つとつとつとつとつとつとつとつとつと

驕ハ奢侈といちぐひ人の氣高く揚て人を見下し馬の
鬻蹄クヒハマルの氣あつがたしくお世祿の人より病あり馬の
うみも其痛ろん時ハきこめてさく下より上はと
の中がきこばる氣ろんハ切と下よりあつげ
やさるづらんきて又桀紂のぶとさと世の暗主とんる
はるハ怒あり其智は諫と拒コトは是とるとんえ秦始皇の
如きも十三より位ツキ子昂ツキ三十一なるこゝの時ハ六國と
あもせられそ習ハ醒人と侮られしものより政事
も一絶ハ一斛の上書とんれしと中へくしとれど
臨氣たろく己らんと師とて古と師とやど監首

と愚し刑罰を嚴し威武をよて世と志ハむべきと
の志わざしてあつても天下の財と府庫ハ聚ツキ飲ツキせられし
故ハ一代の功とむかしくしてさかどに併せられし天
下と二世あらざるに失きこりこれを驕と者とのふ
き前あらざるやされバ國家とも治め事業と勤あんとお
もたぐ先歴史の類と涉獵し古今の當否と辨明をくし
世の諺ハ歴ハハ大學一書よてよし四書小学よて辨か
どくつハハ通く志ありへくづ眼とふきぶては物の
死るべき理ハ万々よなき事也或曰管仲晏子故視て
治術と法リに何くぞ法ハ似たり夫齊管仲乃功と典リゆ

るとあるは唐魏徴の迹も不義あるごとくれども蜀孔
明におけるひとり二子と比較はるるを昭烈帝乃復
興城爲る也とあり仁とほり今新井子う傑紂不逞乃
資と稱するは爲るすの言ふく其之と故伐せし乃非
よ及ざる蓋所好又阿るあるごとく且彼ひとの記載同
稽よ出る少くは豈論定とくも是らむ耶何とさる
にかうりつぎる佐久間文明曰夫遂古者邈不可言可言
者堯舜禹湯文武周公孔子也儒者謂先聖而尊信者也而
其制治之初見者唐堯也堯之治天下也舉舜於側陋試旃
於百揆而遂讓天下是舉業所由起雖安其世然萬世之亂

階也其故何者惟其法傳而舉舉者非其人也且三王更作
崇變更貴建明爭端斯肇讒妒斯兆小人多善人少常也善
人朋少小人黨多故善人多不得在位小人常在位易相或
以年或以月甚至以日後相者舉前相之非欲更張以取稱
譽故法日更改日紊偶舉得一賢百不肖並進賢者常以避
孽爲力小人者常以害賢者爲力自非聖王在上則下常爭
然聖王不常出雖欲毋爭奚得哉故居亂常多矣舉業者其
初志既在宰相人各懷覬覦之心人心之動騷亂之本也是
非舉業與貴變更之所致乎譬舉業者若天之下墜地之上
浮中間甚逼人各謂獲上也天浼地尤不亂而何俟焉管子

所謂四民四處各一其業見異物而不移焉定其心志之術
有故乎然則何以治天下也我邦神聖皇帝以知聖賢不
常出故不取賢能公卿大夫世祿官人世家決不取諸於庶
人除官以秩一建純粹之法而使世世守之不變是以臣無
爭下無企望之心以不變更改不紊雖君不賢臣不肖以一
率遵法後王之政先王之政也所以恆治安也以法與以人
之異也法者常存人者不常賢所以我治彼亂也是以建制
之超軼於彼可知矣彼邦建五刑之目加以笞法雖公卿大
夫或斬之於市或尸之於朝朝授相夕謫之夕與金紫朝笞
之條理煩冗纖法蛛網舉手觸法搖足陷罪刑愈多犯者愈

多其醜至宮刑谷我邦也公卿大夫罪不過竄錮庶人之
刑二放逐與死刑有稍二三差等耳且以公私二條判之犯
公法者不赦私者暨小過者措不訊其親戚規之而已故刑
甚少兵不似彼邦一朝而殺數十百人之慘也是刑罰之制
超軼於彼矣其他至冠昏喪祭之禮食飲器物之制咸勝彼
矣要之我制貴簡易彼制貴繁密簡易從繁密易惰治國
之原不出此數條而悉軼於彼非歟堯之讓也雖出於愛民
而大圮大倫矣國君死於社稷況至於天下乎雖非受於祖
宗之天下然天下重器以天下比之敝蹤其本既輕矣宜乎
後世生企望焉惠民不如常有常之大惠者小也有常則民自

安而惠在其中矣。以惠民却詒孽，千歲大矣。堯之過我邦學儒者，亦為世計，或為識字聖人之道者。治天下之道，王者之事也。以治天下之道為生計，其素違聖教，是舉業之姦流，逮我邦也。文人詩人暨志博者，何訊才稱儒者，衝口說仁義，說治國平天下，見其行不掩其言，行無過者，不免常人。凡俗不識一字，而有謹言馴行者，既出大言而與此侶為伍，亦非可耻之甚邪。且云我邦之治安，由彼道之行矣。不識其實，而妄矯誣，可憎之甚者也。我邦入學者，凡七八歲而就師學，法先素讀畢四書五經，或止或聞講說，少辨字義，雖長老之側說心法，說仁義矯矯驕慢，益于眉間，雖教風之所

致大不好之事也，而非遂業覺然更輒不趨，弓馬劍槍或田獵或博奕，前所學者一朝而悉灰矣。纔以知角字，比旃拱壁，故世人以為童幼之具，是以倡之者一國，而不過數人言之者，不出其徒之外。自公卿大夫至士庶人，言之者甚勤矣。故其道也於我邦甚微焉。非行也，彼邦王者自幼有師傅而教誨，國有學鄉，有師人各游泳沐浴於其道也。可謂厚之至者矣。是須恆保其恭，以莫傾壞固也。然居亂十而八九易代，以十數焉，而其終也變，至為胡其道不行之邦者，恆保恭行之邦者，曷如斯壞也。雖癡人女子猶辨識焉。况格物致知者乎。彼常云格物致知，其格物致知者不知真格物致知與否。

焉可為一笑而已彼既以百煉之道不能支其邦奚得謂以其萬分之一使我治安乎我邦之治安不可與彼同日而語也不藉彼之道炳乎其明如火矣孔子在世之時猶不能以其道化人安時况以其糟粕乎雖然於彼邦也尊信其教寔可也比我邦之教第_二流而已我邦之教者以歌其道溫厚和平六義之中五典自存焉不屑屑名義而名義自然行矣善明其政迹自為教人儆而化矣其教不言與言之異爾我邦之制者素淳朴彼邦之制者素虛文素淳朴者其標自誠實也素虛文者其標自詐偽也其所隔雖一間治亂之二途基于斯矣春秋二百四十二年之間弑君三十六

滅國五十餘秦漢而下至元明弑君殺親害子者谷計不可盡也所謂仁義之邦曷如此哉我邦元弘後亂三十餘年天正前後五六年所是為最保平之間源平相拒不延歲月如前九後三者以有憤於鎮臺盤據其封域以拒命耳非天下之亂也上古雖間有不逞之徒拒命不足煩一旅發即決已亦以不延歲月也故我邦居治十而八九是我邦非_レ制治之至善哉儒云人之為人者五倫暨仁義爾以之教久人被其澤是非我道輔治哉其言似是然知以五倫仁義為聖人之道殊不知我邦素以五倫暨仁義為教矣夫倫理者自然之道有人茲有此道非若異木異艸之始來而滋

蔓者也不啻我 邦漢土雖夷狄亦有此道其建制之純粹
與醜之異耳周之時重九譯來獻者彼素非被聖教以有倫
理故感而來也是以可知我 邦素以五倫暨仁義建制焉
請言其委曲儒道來我 邦者肇於吉備公云如儒之言也
吉備公之前者是亡教也以所生之邦為不如夷狄無情謂之
何也 神聖皇帝統御天下傳至于今是有父子之道也命
令行百官有秩是有君臣之道也貴嫡子賤庶子是有長幼
之序也百官和睦交際有儀是有朋友之道也建干支計日
月統御有紀有冠昏喪祭之禮有宮室之制有衣冠之制有
食飲器物之制事事咸簡易大不似漢制之煩冗而迂也吉

備公之前果無教也莫異鹿猪之羣居何以得為國矣彼所
宗之聖人之道者亞我 神皇之教者大異夷狄之醜制然
其道甚駁也何者至殷湯夏桀不道以受命天極民為名起
兵伐之放桀於南巢泰然奪之天下至周武殷紂不道亦以
受命天極民為名起兵伐之斬紂頭繫旃於白旄泰然奪之
天下其為民實也使臣云君不道民不堪命恐顛墜祖宗之
天下冀孫讓於某地以某地為食邑也湯也擇桀之親戚立
之歸臣位於亳武也幸有三仁之在擇其中立之而歸臣位
於西周也名義與日月俱明矣若桀紂不聽孫讓則以兵安
置諸於小國立其親戚而歸於臣位也名義等明矣然不為

之顧奪之天下，是以拯民為名，其實為奪天下也。孟子不言乎，莫伊尹之志篡也，以攝猶因其志不免篡，况真奪乎於斯君臣之道始，灰矣踰牆穿穴者，自居惡而為惡，湯武假美名而為惡，其心劣穿踰者，也可鄙哉。論者云：舜禹之以讓得也，湯武之以伐取也，其歸一矣。人之無理一胡，至于此乎？夫治教之原者，分善惡之二而已，不善善不惡惡也，何由為治也？宜哉。後世無道常居亂也，因莫善惡一定之分也。以篡弒之人比旃，舜禹所以道之不行也。聞天為大，惟堯則之，又聞天工人其代之，未聞以篡弒為天工，則之孔子曰：天何言哉？四時行焉，百物生焉。天者雖善生生，然無心不可知之者也。故

聖人懼之，王者在上而育衆庶者，也是以倣天之生生而言則而已。若湯武之言，似帝者有耳目鼻口金冠玉衣而諄諄命之狀矣，誣謾天甚者也。又曰：是所以聖人之為聖人也，以為聖人之故為之，是亦虛妄之絕甚者也。堯舜人也，桀紂人也，其行以為至善之事故，號曰旃聖人，以為至惡之事故，號曰旃惡人。焉弒逆者至惡之莫上者也，而反曰旃聖人也，桀紂之惡者劣，湯武之惡也，蓋曰旃賢人哉。以至惡伐惡，孟子所謂以燕伐燕，不如之也。其行也至惡其名也，聖人何適從？縱湯武之罪也，譬其親不善而一家為之，苦甚其子雖殺之，可與又曰：聖人以天下之心為心，立武庚錄父封箕子，微子宗

廟血食非滅之也是亦不倫之甚者也天下之心望桀紂而已非望夏殷之代也退桀紂立其親戚天下之心也其奪者非天下之心也湯武完輯之勛勞可觀也其識不及高氏幼子之見也人一日三食常也已三食而供父母以一食奪也焉得謂養也封武庚錄父封箕子微子不克一食也議論家曰某者小人亡論某者賢故論之責備於賢者也是言寔然以此觀之湯武果賢而為之也其責殊重矣非後世為篡弑者之類也然極口罵後世反聽湯武是冠屨倒施也孟子亦云聞誅一夫之紂矣未聞弑君也是孟子之私言也紂雖不道君也湯武雖賢臣也君臣者公名一夫非公名也秦誓論

告之言不得如此不言非公言也孟子應問之辭力欲掩湯武之罪者也仲尼正名之言果非與宗社至重箕子微子侶相圖屏紂也宗社全而永為周之天下然不為之以其力不足與或恐亂人臣之分之故也力不足也以人心未離也恐人臣之分也雖臣親戚也親戚猶不為之況武王乎况奪乎其罪不容誅也楚莊王滅陳也遂欲縣之而容一言之諫復之不取也可謂湯武者楚莊之罪人也非與世之眩于湯武者以治民之可法也湯武之狡黠知不治不為用故善治可謂詭譎之雄者否盍返其親戚其不返者克己欲也淮南子云夫狐之捕雉也必先卑體彌耳以得其來也彼嚴恭寅畏

夙夜畏威者，卑體彌耳，以潤色譎也。其說譎出，新莽之上者也。莽者奪來者也。湯武者，往奪者也。其間亦若干莽也。奪之後，以仁治民，是亦一湯武也。然以虐民，遂敗智與不智之一間而已。於其弑逆也，一矣。假令有千堯萬舜之治，豈蔽弑逆之罪哉？孟子行一不義，殺一不辜，而得天下，皆不為之也者。非聖人之品第乎？以弑逆不為不義，為名義大廢矣。宜乎周之諸侯，倣湯武之轍，弑逆猶稱聖人，況敵國乎？於此，彼我欲相奪攻伐，大起遂為戰國，鞠為胡履，霜之警，可恐哉。是湯武施教於上，而戰國受法於下也。當周之末，孔夫子者，懷不訾之才，傑出於其間，須筆誅湯武之罪，以明大義，一洗道穢垢。

惜矣哉！其慮不出於此，反謂祖述堯舜，憲章文武，是以牛矢廁階，珠非邪於此，五典再灰矣。立制之原，雖以孝君臣之道之為重，孝者教也，君臣之道者制也。無君臣之道，不能為國，不為國，以人不得立，故君臣之道之為重也。君雖殺其親，其子不得以為讐，君臣之道重也。君臣之道既泯矣，所以為胡也。是以我邦諸侯或不道為其臣者，恐併家國，失之或幽其君而立其親戚，不獲幽其君而代立也。儻有代立之圖，上聞其罪及三族，幸以其初不出弑逆之聖人，君臣之道分明，而不擾儻縱之禍亂，胥胎于此之故也。初，大王以西伯之有聖瑞，欲立季歷，以及西伯、泰伯、仲雍知之，走荊蠻以避于季歷。

仲尼以稱焉民不得稱泰伯之賢可知立泰伯也何害西伯之為聖欲及西伯者欲大門戶也闕愛於二子使二子不得事父母其仁何處有也叛心始於大王武王終之也於此父子之道再泯矣非若堯讓舜者也堯之讓也雖詒孽於後世至大而其志為天下公也大王者為門戶私也其異堯萬萬圯大倫之事集於一門可謂罪人之祖也大抵漢土之常亂者由君威之弱民威之強也其素出堯之讓與湯武之伐及崇變更貴虛文矣西伯之舉呂尚也湯之舉伊尹也尊之則不得不多祿遂習制祿君之祿十分之一為卿之祿也祿多則人多人多則威強自然之勢也故我邦制祿君之祿五

十分之一或百分之一為卿之祿也是以君威常強臣威常弱莫手反遣體之憂矣堯典曰惟狂思為聖惟聖不思為狂焉彼我之涇渭思茲昭昭矣何俟余贅言質彼以彼言莫據者以我邦之明法斷之焉

成形圖說卷之六終

小野
氏藏書

